

インターフェロン

インフル症状の原因 謎解明

北大遺伝子病制御研究所の高岡晃教授らの研究チームが、体内でインフルエンザなどのウイルスの増殖を抑える一方、発熱などの症状の原因にもなるタンパク質「インターフェロン」の生成を制御する仕組みを解明したと発表した。この仕組みを応用すれば、ウイルスへの免疫力を高めたり、感染症の症状を和らげたりする新しい治療薬の開発が期待できるといふ。



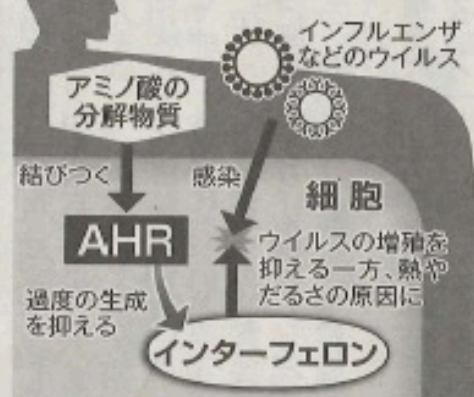
高岡晃教授

高岡・北大教授ら 新薬の開発に期待

4月19日付の米国の免疫学雑誌「ネイチャーイムノロジー」(電子版)に掲載された。インターフェロンは、ウイルスに感染した際、体内の細胞で作られる。ウイルスから体を守る半面、発熱や倦怠感などを引き起こすことがあり、インフルエンザの症状の原因でもある。過剰に生成されないよう体内で調節されているが、詳しい仕組みは分かっていなかった。

高岡教授は「感染症などの新しい治療につながるが、インターフェロンは、ウイルス性肝炎の治療などにも用いられている。

インターフェロン生成を制御する仕組みのイメージ



高岡教授らは、有害化学物質のダイオキシン類がヒトの免疫機能に害を及ぼす仕組みを調べており、その一環でダイオキシン類の侵入を感知する「AHR」という細胞内のタンパク質に着目。マウスを使って、AHRを持つ正常な細胞と、AHRを持たない細胞のそれぞれをインフルエンザなど6種類のウイルスに感染させ、両細胞が作るインターフェロンの量を比べたところ、AHRを持たない方が数倍、数十倍多いことが分かった。ヒトの細胞を使った実験でも同様の結果が得られたという。

高岡教授は「感染症などの新しい治療につながるが、インターフェロンは、ウイルス性肝炎の治療などにも用いられている。

畑作農
ールデン
植え付け
「休みな
をもつて
ている。
様子が濃
雪解け
は、この
例年より
の4月21
一斉に植
が始まっ
いけば、
イークの
え付け作
かなと聞
の、そん
はいかな
ールデン
日の4月
日にか
で、畑に
の雪が積
が家では